

〔学 会〕

東京女子医科大学学会 第202回例会抄録

日 時 昭和51年2月27日(金)午後1時半より
場 所 東京女子医科大学本部講堂

1. ブロムメチル製造作業員の尿中ブロム量, 神経学的所見について

(第二衛生)

○百溪 浩・石津 澄子・佐藤 稔

ブロムメチルはガス体で、穀類、土壌などの燻蒸、消毒に使用されるが、高濃度の暴露では、呼吸器等の刺激、肺水腫等を来す。また慢性長期の暴露では神経の障害が主であると言われている。われわれは某ブロムメチル製造工場作業員の健康診断で、問視診、神経学的検査、尿中ブロム量測定などをおこない、検討を加えた。

本健康診断対象者は、ブロムメチルおよびブロムに慢性的に暴露されており、慢性中毒又は反復性の亜急性中毒をおこす可能性を有するもので、時に皮膚の腐蝕等が発生しているものである。このような暴露条件においては暴露の指標として尿中の諸物質の測定が重要であるが、本例においても尿中ブロムがそのよき指標となり得る事が判明した。また神経内科の検査においては、ブロムメチルによるものと考えられる多様な神経症状が認められた。現在のところ、自覚症状、内科的所見と尿中ブロム量との相関は不明確であるが、今後更に追究し健康管理指標の確立につとめる予定である。

2. 組織立体再構成の一新法について

(第一病理) 武石 詢

病理組織学は主として光学顕微鏡を基礎にして成立している関係上、観察のためには組織を数 μ の厚さに薄切する必要がある。

したがって観察者はどうしても組織を平面的、すなわち二次元的に受取らざるを得ないという重大な欠点がある。

この欠点を補い、組織を3次的に観察する目的で古来組織再構成法が行われて来たが、何分にもこれを行うには多数の連続標本作製し、その一枚一枚を顕微鏡で

拡大、描画、再構成するという歴大な手間と時間を必要とするので、この方法が実際に行われることは極めて少ないのが現状である。

ところが最近、顕微鏡、投影描画装置の改良開発と相俟つて発泡スチロールなど合成樹脂材料の目覚しい開発が行われて来たので、これらを利用して、従来に比しかなり容易に組織立体再構成を行うことができるようになった。

方法としては顕微鏡として千代田光学KK製 MT-B 形顕微鏡、および同社製 PD-8 投影描画装置を用いて、セキスイ化学FSP(ポリスチレンペーパー)上に標本を拡大投影描画し、これを千代田光学の試作による組織再構成用ニクロム線カッターで切抜き、再構成を行うという方法で、これらの特色と実施要領の詳細を述べた。

3. 躁うつ病における炭酸リチウム療法 第1報

(精神神経科)

宮本 真理・堀川 直史・○作田優子
岩井 一正・高山美登利・山下 恵子
吉増 克実・藤原 信禎・石川 陽子
上条 節子・坪内 直子・高津 明寛
寺坂小夜子・大木 卓朗・田中 朱美
浅野 欣也・稲川 鶴子・田村 敦子
赤田 豊治

炭酸リチウムによる躁うつ病の治療効果はかなり以前より報告されているが、当教室でも昭和50年1月より躁うつ病における炭酸リチウム療法を開始したので、50年11月末までの現況を第1報として報告する。

対象は躁うつ病、慢性躁病、躁病、うつ病患者で、16歳から66歳に及ぶ男38例、女37例の計75例で、入院59例、外来16例である。

方法は、錠剤の経口投与で、初回量 400—800mg/日から始め、血中リチウム濃度を測定しながら漸増、最高

800~2000mg/日，維持量 600~1800mg/日とした。症状の急変を防ぐため多くの症例で，これまでの向精神薬を減量して併用したので，初めから炭酸リチウム単独療法を行なつた症例は僅少である。

結果は，慢性躁病23例中21例に効果を認め，躁病では8例中6例に効果を認めた。躁うつ病では，躁状態35例中27例に，うつ状態6例中2例に効果を認め，躁状態の予防を目的とした2例にも予防効果を認めた。うつ病は不安焦躁の強い1例であつたが著効を奏した。躁病に対する効果は，症状全般を鎮めたが，多弁，多動，運動不安，妄想奔逸，易怒，お節介，周回との摩擦，緊張，不満，反抗など運動推進準備性の亢進や自制減弱症状を早く抑え，上機嫌な気分はおそくまで残る傾向が見られ，不眠，日内変動もあまり改善されなかつた。

慢性の経過の躁病や躁うつ病では，急性増悪期の襲来を防ぐか或は軽く経過させることが出来るようで，これまで何度もみられた衝動的自傷行為や激しい性的脱線，幻覚妄想の再燃強化などがなくなつた。幻覚妄想型躁病では新鮮な症状にはよく効く傾向がみられたが，経過の長いものでは幻覚は消えても妄想は抑えられた型で固定して残っている例が多かつた。

副作用は一過性のものが多いが，52例に認め，うち6例は治療を中止した。

更に脳波，心電図，血清電解質，肝機能，血液像，尿所見，尿中 Na, K の排泄リズムに及ぼす影響を検討中である。

4. 心内膜心筋生検に関する基礎的研究。組織計測法による肥大心筋の診断について

(心研・内科)

○広江 道昭・関口 守衛・白 秀郷
(第1病理) 今井 三喜
(法医) 平瀬 文子

5. 汎発性腹膜炎に対する超音波発生装置を併用した腹腔洗浄効果についての実験的有効性について

(外科)

○平林 武・織畑 秀夫・太田八重子
倉光 秀磨・鈴木 忠・岡崎 武臣

汎発性腹膜炎に対する腹腔洗浄療法に関しては多くの報告がなされてきたし，また，われわれ外科医が手術時一特に腹腔内一の汚染に際し日常好んで用いる方法でもある。そこで，この洗浄療法の目的である汚染物質の除去効果をなお一層高めるための手段として，超音波を利用した手術用手洗装置にヒントを得て，小型化した

超音波発生装置を試作した。

実験には雑種成犬を用い，腹膜炎はそれぞれの実験犬自身の糞を注入することにより人為的に作成した。コントロール群では，1時間後に開腹し，温めた生理食塩液 500ccずつで洗浄をくり返し，それぞれの洗浄液の単位容積当りの細菌数を培養にて算出した。超音波発生装置使用群では，上記方法に加えてそれぞれの洗浄ごとに超音波洗浄を併用し，同様の算出をした。各回毎の菌数が初回の何%に減少したかを両群について比較し，超音波発生装置を併用した洗浄方法が有意であるとの結果を得た。

6. IIc と誤認した胃体大弯側潰瘍の1例

(第2病院外科)

○山崎 靖夫・松村 功人・松本 邦夫
川田 裕一・阿部 泰恒・梶原 哲郎
坪井 重雄

(同内科) 本多 祥之

大弯側潰瘍は，比較的まれなものであり，病変部を胃体大弯側と限局するならば，潰瘍の頻度は，さらに少なくなると言われている。現在までに，大弯側潰瘍については，かなり多くの報告があるが，胃体大弯側に限つての報告は少ない。いずれも胃全体の大弯側潰瘍であり，胃角部や幽門部のものも含んだ潰瘍の報告が多いのである。われわれは，臨床的にX線所見上 IIc と考えられる症例を経験し，外科的に処置を行い，術後の検査で UI-II の良性の単発性潰瘍に遭遇した。

よつて，この大弯側潰瘍の1例を中心にして，胃体大弯側潰瘍について文献的考察を行い，検討を加えて報告した。

7. 小腸平滑筋肉腫の1例

(第2病院外科)

○成味 純・服部 俊弘・高 興弼
蒲谷 堯・梶原 哲郎・坪井 重雄

小腸平滑筋肉腫は比較的希な疾患であり，下血や貧血管を主訴としたり，あるいは腹膜炎や腸重積症をきたす一方で偶然発見されることもあり，本症に特有な症状のないことからその術前診断は困難な場合が多い。

最近われわれは，急性虫垂炎との術前診断にて緊急手術を行なつた空腸の平滑筋肉腫を経験したので報告する。

症例は32歳男子で，心窩部痛よりはじまり，しだいに右下腹部に限局する腹痛と悪心・嘔吐を主訴として来院した。右下腹部の著明な圧痛，Blumberg 徴候をみとめ